NEWS

JAAF HIROSHIMA
陸協ひろしまニュース
一般財団法人 広島陸上競技協会
第78号
H27.3.13発行

優勝! 3年ぶり8回目!

高校駅伝界最強「チーム世羅」

〈提供：月刊陸上競技〉

陸上人　駅伝　# FILE0017

世羅高校

男子
第65回 全国高等学校
駅伝競走大会

Sera High School

2時間2分台で3年ぶり8度目の優勝

優勝タイム：2時間02分39秒

区間（距離）	選手名（学年）	区間記録	区間順位	通過記録	通過順位
第1区　（10.0km）	新迫志希　（2年）	29'50''	6	29'50''	6
第2区　（3.0km）	笠井孝洋　（3年）	8'19''	4	38'09''	6
第3区　（8.1075km）	ポール・カマイシ（2年）	22'58''	1	1°01'07''	1
第4区　（8.0875km）	中島大就　（2年）	23'23''	1	1°24'30''	1
第5区　（3.0km）	山口竜矢　（3年）	8'43''	6	1°33.13''	1
第6区　（5.0km）	井上広之　（2年）	14'41''	1	1°47'54''	1
第7区　（5.0km）	吉田圭太　（1年）	14'45''	2	2°02'39''	1

1区（新迫志希）

2014年の広島陸上界で、一番のニュースだったと言っても過言ではないだろう。昨年12月21日にあった第65回全国高校駅伝の男子で、世羅高が3年ぶり8度目の優勝に輝いた。優勝回数は西脇工高（兵庫）に並び、史上最多タイ。ゴールタイムの2時間2分39秒は、世羅高史上最高で大会史上4位。2位との差はこの10年で最大の1分57秒と、記録づくめの圧勝劇だった。

「今年の世羅の力は抜けている。2位狙いだった」2位になった佐久長聖高（長野）の高見沢勝監督はレース後にそう語ったが、それはライバル校全ての監督の思いであったろう。5000m平均タイムの14分08秒は出場58校の中でずば抜けて速い。新迫志希、ポール・カマイシという二枚看板以外にも、中島大就、井上広之、吉田圭太ら14分20秒を切っている選手がずらりと並ぶ。**「2人がブレーキしても、追い付かない」**開会式ではそんな声も聞こえた。

カマイシは8月のインターハイ男子5000mを13分45秒12で制覇。新迫も10月の長崎国体少年男子A5000mで日本人トップの2位と、トラックでも好成績を残していた。11月2日の広島県高校駅伝では大会記録（2時間4分14秒）には届かなかったものの、2時間5分49秒で優勝。同月16日の中国高校駅伝でも、主力5人を欠きながら2時間5分38秒をマーク。世羅を率いて11年目となる岩本真弥監督も**「（今年の2年生は）力が違いますからね。彼らの強さはメンタルの強さ。どんな状況でもきっちりとレースをして、タイムを出してくる」**と十分な手応えを感じていた。

「史上最強の布陣」は、チーム内での激しい競争から生まれた。中心にいたのは2年生だった。3年の笠井孝洋主将は**「生意気な連中だったが、とにかくよく練習していた。後輩に負けたくないという思いがモチベーションになった」**と語る。中島は同級生の新迫に強いライバル心を燃やし、タイムを伸ばした。井上は高屋中の1年後輩になる吉田の存在を刺激にしたという。力を認め合い、切磋琢磨しあえる存在がいる。このチーム環境こそが、王座奪還への大きな推進力になっていた。

優勝する力があるからこそ、体調管理には万全を期した。6秒差の4位に終わった2013年は、大会前に主力がノロウイルスに感染。十分な調整でレースに臨めなかった。今回は、都大路の試走を約2週間早め、気温が下がり、ノロやインフルエンザなどが流行する前に終えた。**「今回は風邪やけがで悩まされずにすんだ。ベストオーダー。状態は問題ない」**と言い切った岩本監督。12月20日の開会式前の監督会議で発表されたオーダー表が、ライバル校の戦意を喪失させた。

「優勝候補の大本命」として臨んだ21日のレース当日。都大路は前日の雨も上がり、絶好のコンディションとなった。世羅のレースプランは過去の優勝時と同じく「先手必勝」。岩本監督が唯一気にしていたのが、1区新迫の走りだった。「1区の30秒は1分30秒」と言われるように、1区で大幅な遅れを取ると、2区以降が冷静に力を発揮できず、命取りになるケースがあるからだ。新迫も**「自分が失敗したら、（レースが）駄目になる。プレッシャーと闘いながらだった」**タフな精神力が試される舞台でもあった。

新迫は冷静だった。序盤は前の選手を風よけに使い、体力を温存。6km過ぎで先頭に並んだ。終盤のスパート合戦で遅れを取り、区間順位は6位。しかし、1位の下史典（伊賀白鳳）とはわずか11秒差で2区笠井につないだ。新迫のつくった流れに乗り、笠井も区間4位と好走。1位市立船橋（千葉）と18秒差で3区カマイシにたすきが渡った瞬間、かすかな不安は消え、Vへの視界が完全に開けた。

「これで決まったと確信した。あとは安心して見ていた」岩本監督にそう言わせたのは、4区以降の充実した布陣。これこそが、今年の世羅の本当の強さと言えるかもしれない。**「2位との差は分からなかった。僕が決めるつもりで走った」**とは4区中島。区間1位の走りでカマイシのつくった貯金を1分40秒まで広げた。その後も、5区山口、6区井上、7区吉田が独り旅で2位との差を広げ続けた。

14分10秒前後の選手をエース区間ではなく、後半区間に起用できる選手層の厚さ。**「昨年6秒差で負け、みんなが1秒を縮めていこうと歯を食いしばってきた」**と笠井主将。岩本監督が就任してから、11年で4度目となる優勝。**「これまでで、もっとも安心して見ていられるレースだった。最初から最後まで座って見たのは初めてじゃないかな」**指揮官は安どの表情で何度も宙を舞った。

地元世羅の
皆さまの応援に感謝

さて、2015年の大会には、第1回、第2回大会以来となる同校64年ぶりの連覇が懸かる。今年のメンバーで卒業するのは3年生の2人だけ。チームが目指すのは、連覇に加え、仙台育英高（宮城）が第55回大会に樹立した大会記録の更新ということになる。2時間1分32秒は高校駅伝界で「神の領域」と呼ばれている。**「今年はタイムよりも勝負だったけど、来年は記録を出すつもりで挑みたい」**と中島。伸び盛りの選手がそろっていることを思えば、決して夢物語とはいえないだろう。名将、有能な選手とスタッフ、彼らを支える学校、町…。最強の「チーム世羅」が今年、高校駅伝の歴史を変えてみせるかもしれない。（K）

全国高校駅伝競走大会を終えて

「ほっとした」レースが終わっての率直な気持ちである。前評判が高く、専門誌や新聞では「一強、抜きんでている」。地域では「やれ優勝だ、パレード準備だ」と注目され期待が高まる中、生徒にプレッシャーを感じさせずに大会に集中させる環境づくりに頭を悩ませた。現に例年、各種の取材に時間を割かれる。取材に不慣れな生徒はそれだけで舞い上がってしまう。それでなくても周囲からのプレッシャーは知らず知らずのうちに感じているだろうから…。そこで今年度はマスコミ各社に取材日の指定をさせていただいた。これはうまくいったかなと思っている。

レースは、エース新迫がプレッシャーのかかる1区で粘りの走りで流れをつくり、理想的な展開で終始レースを展開することができた。駅伝は先手必勝、先行逃げ切りが定跡であり「すべて想定通り」での勝利となった。勝利への裏付けはいくつかあった。まず、新迫が全国トップレベルの選手に成長したことがあげられる。その新迫を目標に同学年の中島や井上がライバル心を持ちトレーニングできこと。急成長した1年生の吉田の加入など、良い意味でチーム内の熾烈なレギュラー争いがあったこと。競技会や記録会など高いレベルで確実に成績を残せる生徒が育ってきたこと。チーム全体がキャプテンを中心に和気あいあいとした雰囲気であったことなどがあげられる。当然、地域や県民の皆様による多大なるご支援と応援があってこその結果であると感謝している。

さて、次年度は65年振りの二連覇と「神の領域」と言われる高校記録の更新が目標となる。初心に帰って「現状維持は後退」である事を肝に銘じて生徒と共に、目標に挑戦し実現したい。

広島県立世羅高等学校　監督　岩本　真弥

全国高校駅伝競走大会に出場して

私たちは昨年、1位の山梨学院大学付属高等学校に、わずか6秒の差で負けてしまい4位となって涙を流しました。7区間1人1秒を縮めていれば優勝出来ていたことを後悔し、新たに1秒の重さを痛感しました。私たちは全国大会の翌日から、1秒でも早く走れるように「原点回帰」「凡事徹底」の2つのテーマを掲げ、一から生活を見直し、あたり前のことをあたり前にできるチームづくりに力を入れました。全国制覇を活路を開いたのは2年生たちでした。彼らの前向きで積極的な練習態度は、3年生、1年生を巻き込み、いつしかチーム全員がお互いをライバルと意識し、互いに切磋琢磨し、レギュラーの枠を競り合うようになりました。そうして走った県予選は、自分たちの目標タイムにほど遠い結果に終わり、納得いく走りができませんでした。気温が比較的高く区間によっては向かい風が強かったという状況はありましたが、心の中に何かが足りなかったのかも知れません。私たちはその失敗を成功への布石だと信じ、メンバー選ばれた者は、選ばれなかった者の想いも一緒に背負っているという意識を持ち、新たに全国大会へ向けて練習を積み始めました。全国大会当日私たちは「最高優勝、最低優勝」を胸に、自分を信じ仲間を信じ、1秒でも速くタスキを繋ぐ気持ちで走りました。

圧倒的勝利を勝ち取れたのは、昨年の涙が糧となり、ライバル意識の練習は自信となり、自分たちの走りが確信となった事。さらに何より日頃からサポートしてくださる地域の方々、応援してくださった全ての方々のおかげだと思っています。本当にありがとうございました。

広島県立世羅高等学校　主将　笠井　孝洋

全国高校駅伝に優勝して

僕たちは全国高校駅伝で優勝することができました。昨年は4位という結果に終わりとても悔しかった分、大きな喜びを感じました。僕はこの夏、思った走りができず苦しみました。昨年僕はアンカーを走ったので負けた悔しさは知っています。だから焦りを感じていました。しかし、監督の指導や他の先生方の声掛け、また家族や地域の皆様の応援、そしてチームメートの支えがあって、この大舞台で走ることができました。たくさんの方々の力で今の自分があるので、深く感謝しています。

しかしながら、この結果に満足しいつまでも喜びに浸っている訳にはいきません。岩本先生はまた0（ゼロ）からのスタートだとおっしゃいました。僕はその言葉を忘れず常に謙虚な姿勢で練習などに取り組みたいです。それができればもう少し強くなれそうな気がします。ひとつでも上のレベルの選手をめざしてこれからも頑張っていきます。

広島県立世羅高等学校　2年　中島　大就

全国高校駅伝

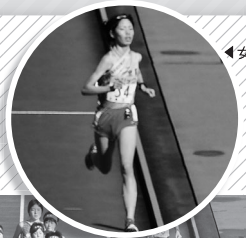
男子優勝　世羅高　2時間02分39秒

区間	学年	選手名
1区	2年	新迫志希
2区	3年	笠井孝洋
3区	2年	ポール・カマイシ
4区	2年	中島大就
5区	3年	山口竜矢
6区	2年	井上広之
7区	1年	吉田圭太

女子も
過去最高順位!

女子10位　世羅高　1時間09分35秒

区間	学年	選手名
1区	2年	小吉川志乃舞
2区	1年	向井優香
3区	2年	長尾明日香
4区	3年	中畑友花
5区	3年	背戸美幸



◀女子10位でゴール

▼女子スタート

天皇盃 第20回 全国都道府県対抗男子駅伝競走大会を終えて 13位 [2015.1.18 in 広島]

節目となる第20回の記念大会の優勝をめざし、今年度もジュニア層の強化に取り組んだ。特に、昨年度までの反省をふまえ、プレッシャーのかかる1区を安心して任せることのできる最上級（高校3年生）の育成を最大の課題とした。だが今大会の高校生で選手登録した4人の内訳は2年生3名、1年生1名であった。しかしながら、事前のランキングでは高校生部門の1位であり高校生の強化に成果がみられ手応えを感じていた。

だが、結果は惨敗。1区の予想外の出遅れが響き期待を裏切る結果となってしまった。駅伝の鉄則は先行。レースプランが大きく崩れ、中高生は全くいい所なくレースを終えた。レース後に正直「ジュニアの強化に取り組んだ1年はいったい何だったのだろうか?」空しさと無力感に苛んだ。

監督を仰せつかって5年、ジュニア層の強化を最大の目標に取り組んだ5年であった。スタッフはじめご協力いただいたみなさんのおかげで、ようやく高校生が全国でも勝負できる所までたどり着けたのだが…。現状でできる限りの強化策をスタッフと共有して実施し、強化の方針は間違っていないと思うのだが結果が残せなかった事が歯がゆい。どの選手も広島県のために精一杯走ってくれたのにレース後、涙する中高生の姿をみて心が痛んだ。「選手には責任はない」結果に対しての全責任は監督の私にある。大学生・社会人が充実している今の広島県が栄光を手にするために、課題と責任を明確にし「速い選手ではなく、強い選手」の育成をめざしてやるしかない。

広島県男子チーム　監督　岩本　真弥

皇后杯 第33回 全国都道府県対抗女子駅伝競走大会を終えて 28位 [2015.1.11 in 京都]

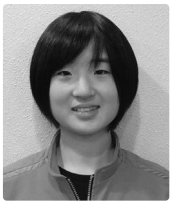
初めに広島県チームを応援してくださっている皆様、また毎年選手一人一人に激励して下さる京都広島県人会の皆様に心より感謝申しあげる。

結果として3年連続順位を下げてしまったことが大きな課題として残った。選手が持つ本来の力を発揮させることができず、広島県代表監督としての自覚の甘さを痛感した大会となった。

選手個々の自己記録は昨年度のチームを上回っていた今回、12年ぶりの入賞と目標を掲げた。しかし、年末ごろから選手の体調不良などが出始め、オーダー変更もあり苦戦することとなった。このことから今後はジュニア選手、成年選手とも層をより厚くしていく事が求められる。また、預かった選手の力を最大限に引き出すために、チーム運営の方針や強化合宿の内容も見直し、改善すべき点を明確にしていく必要があると感じた。特に、ご協力して頂いている各学校の指導者と連携をより密にしていく中で、選手の状態を把握し、広島県一丸となって力を発揮できる体制作りをしていく。また走りだけでなく、競技者としての心構えを伝え、本大会の代表にとどまる事なく、全国の舞台で輝けるジュニア選手の育成に努めたい。

今回、不測の事態があり、チームの出場が危うくなる中、最善の状態で選手を大会へ送り出すべく多大なるご尽力をしてくださったコーチ、支援スタッフの先生方には深く感謝申し上げる。

広島県女子チーム　監督　山田　貴子

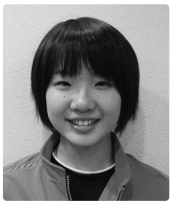


先日行われた全国都道府県対抗女子駅伝では、たくさんの温かいご声援、ありがとうございました。広島県は28位という結果でした。今回は駅伝レースを振り返ってみて、チームがみんなで掲げていた上位浮上という目標を達成できず悔しい気持ちですが、次こそはという気持ちのスイッチが入った気がします。

私は今回、5区を走らせてもらいました。27位でタスキをもらい、とにかく一つでも多く順位を上げれるよう、前にいる人を追いかけて前半からペースを上げて走りました。5区は上りが多かったけど、そののぼりで前との差を縮めて5人抜くことができました。また、沿道でたくさんの方々が広島県を応援してくださっていたので、それがすごく力になり最後まで諦めずに全力で走り切ることができました。

全国都道府県対抗女子駅伝を終えて、より広島県チームみんなと絆を深めることができたと思います。でも、今回の結果には満足したくないです。来年も走らせてもらうことができたら、いつも支えてくださっている方々に恩返しのできる走りをしたいです。そして来年こそ目標を達成したいです。そのためにも、日々の練習を頑張っていこうと思います。これからも、広島県の応援よろしくお願いします。

広島県立世羅高等学校　1年　向井優香



私は今回、全国都道府県対抗女子駅伝に広島県チームとして参加させてもらい、補員ということで、選手のサポートをさせてもらいました。昨年まではテレビや新聞で見ていた憧れの舞台を間近で、その上チームとして参加させてもらうことができ、本当にいい経験をさせていただきました。この大会は中学生から社会人までが一つのたすきをつなぐため、順位の変動が大きかったです。その分、一人ひとりの責任の大きさを特に感じました。また、それが駅伝のおもしろさだと改めて感じることができました。そしてやはり、「走っている人」というのはキラキラしていてかっこいいなと思い、私も走りたいという気持ちがより高まりました。

今年の広島県チームは28位と悔しい結果となりましたが、これは誰がどうだったというものではないです。だから来年は私が、広島県チームの上位浮上の力になりたいと思います。今回走ることができず、悔しかったです。しかし、来年は走ることが目標ではなく、そこでどのような走りをするかです。

広島県ナンバー 34番を背負って走るからには責任を持ち、広島県民を感動させるような走りをしたいと思います。そのために、練習を積み力をつけ、「お前なら任せられる」という選手になりたいです。また、感謝の心と挑戦の心をもち、強い選手になりたいです。

広島県立世羅高等学校　1年　見田杏花

坂中学校 新チームで参戦 第29回福岡国際クロスカントリー大会で優勝 [2015年2月21日]

このたび、福岡国際クロスカントリー大会の中学男子（2km×4人）の部で優勝することができた。昨年12月の全国中学校駅伝大会で悔しい思いをした選手たちが、新チームとして良いスタートを切ってくれたと思っている。エントリーチーム124チーム中、全国中学校駅伝大会出場校は7校、そのうち坂中学校より上位校は2校だった。しかしながら、今大会出走メンバーが担った4区終了時点の上位校は3校だったので、「全国で負けた相手より一つでも上でフィニッシュ（3位以内）」を目標に挑戦した。レースでは1区梶山が全国駅伝第1区・区間1位の選手に2秒差の2位で好発進し、良い流れができた。2区増木、3区細迫の1年生コンビも全国駅伝で区間1位や2位の選手に食らいつき、粘って襷をつなぎ、最終4区には1位と9秒差、2位と7秒差の3位で中継した。アンカー岩本は徐々に差を詰め、1km付近で2位浮上、ラスト400mでトップに立ち優勝テープを切ってくれた。全国中学校駅伝大会16位という惨敗から1週間後、2年生中心とする新チームは、京都まで電車を乗り継いで全国高校駅伝へ見学に行った。その際、目の当りにした世羅高校男子の優勝シーンはとても感動であり、良い刺激となった。それが選手たちにとって、新たな目標設定のきっかけとなり、今回の結果に繋がったと思っている。選手たちには、この経験を自信とし、次なるトラックシーズン及び駅伝シーズンに向け、更なる挑戦、更なる向上を目指し、再び全国の地で勝負してくれることを期待し、共に精進していきたい。

坂町立坂中学校　コーチ　肥田義孝

Time Another
Report

年代別レポート

小体連

8月末の全国クロカン広島県予選会では、優勝したい気持ちが強く選手たちは緊張していましたが、男女ともに力を出し切り2年連続で優勝することができました。全国小学生クロスカントリーリレー交流大会では、昨年41位ということもあり、プレッシャーもなく「最初からガンガン、最後までガンガン」の走りをしてくれました。結果は24位。目標の広島県ナンバー34より上位であったことを皆で喜びました。

この大会に限らず、次のことを大切にしています。1つは、規則正しい生活、食事、睡眠、疲労回復のケアなど保護者の協力を得て、元気よくスタートラインに立つこと。2つ目はオーバーペースで最後はペースダウンしてもいいから、積極的なレースをすることです。

全国大会でのレース経験を中学校や高校で活かし、都道府県対抗駅伝の広島県選手になってくれることを私は望んでいます。

最後に、金尾先生には、大阪の会場で選手の応援や写真をたくさん撮っていただき、ありがとうございました。

熊野陸上スポーツ少年団　監督　熊野　孝則

中体連

中学生の長距離・駅伝シーズンを振り返ると今年も多くの選手が活躍した。夏の全中香川大会には男子3000mに8名、女子1500mには4名が出場した。全中では入賞者を出すことができなかったが,10月のジュニアオリンピック陸上（新横浜）ではC男子（1年）1500mで増木祐斗（坂中）が8位。A女子（3年）3000mで大西響（広島三和中）が9位という結果を残した。

11月の中国中学校駅伝では男子は坂中が2位に30秒以上の差をつけ優勝。女子は八本松中が3連覇を果たした。両校は12月の全中駅伝に県代表として出場、男子は16位、女子は24位という結果であった。男子は3年生が1人だけという若いチームなので来年の活躍が期待できる。しかしながら全国の長距離レベルは年々向上しており全国で勝つには、個々の力を伸ばすことも大事だが、メンバーの体調を整え、多くの経験を積ますなど、多方面からのサポートなしには達成できない現状になってきている。都道府県対抗駅伝には男女それぞれ2名が京都、広島を走った。タイムや結果だけでなく代表として実際に走った経験が選手をより成長させていくと思う。今年、新たに開催された中国女子世羅駅伝は中学生にとって大きな目標となり、地域の代表という誇りを胸に、実際に走ることができる素晴らしい舞台となった。女子に限らせてしまうが各学校はこの大会を目標の一つに加え、選手の成長の場として欲しい。毎日の部活動指導に加え、合同合宿や練習会を支えて頂いている指導者の方々には感謝いたします。

広島県中学校体育連盟陸上競技委員長
広島市立矢野中学校　濱村　祥水

高体連

2014年度高校生の活躍

駅伝の季節となった。本年度は広島県代表として男女とも世羅高、男子記念大会による中国地区代表として広島国際学院高の3チームが全国高校駅伝へと出場した。

優勝が期待された男子代表の世羅高は盤石の強さの中で、歴代最多タイとなる8度目の優勝を飾った。タイムは2時間02分39秒で、県最高記録を更新した。世羅高は男女とも1・2年生の勢いを感じる大会となり、来年度も上位入賞を目指してほしい。中国地区代表の広島国際学院高も、故障者の多い中、49年ぶりの力走を見せてくれた。

出場メンバーは次のとおり。

◎全国高校駅伝

男子	**優勝**	**世羅高**	**2時間02分39秒**
1区	2年	新迫志希	
2区	3年	笠井孝洋	
3区	2年	ポール・カマイシ	
4区	2年	中島大就	
5区	3年	山口竜矢	
6区	2年	井上広之	
7区	1年	吉田圭太	
	51位	**広島国際学院高**	**2時間12分37秒**
1区	3年	川平浩之	
2区	3年	兼好優馬	
3区	2年	岡原仁志	
4区	2年	田淵智也	
5区	3年	加悦崇生	
6区	2年	藤井拓実	
7区	1年	柳瀬和樹	
女子	**10位**	**世羅高**	**1時間09分35秒**
1区	2年	小吉川志乃舞	
2区	1年	向井優香	
3区	2年	長尾明日香	
4区	3年	中畑友花	
5区	3年	背戸美幸	

広島県高等学校体育連盟陸上競技部競技力向上委員長
広島県立広島皆実高等学校　樋口　裕志

学生連盟

今年度の中四国学生連盟広島支部の運営の後半の大会は、まず9月14日（日）に道後山高原クロカンパーク開催された、第46回全日本大学駅伝対校選手権大会中国四国地区予選会　第19回中国四国学生女子駅伝競走大会である。

予選会では新たな試みで、スタート地点を変えたことにより、スタート時の列がより公平に行えるように工夫をした。結果は1位広島経済大学4時間12分06秒、2位広島大学4時間15分09秒、3位環太平洋大学4時19分03秒となり、1位の広島経済大学が秩父宮賜杯第46回全日本大学駅伝対校選手権大会への切符をつかんだ。

次に10月24日から26日まで、第37回中国四国学生陸上競技選手権大会が広島スタジアムで開催された。今大会では大会記録が数多く出た。まず初日の女子ハンマー投（4.000kg）で居川汐里（四国大）が58m58をマーク。2位の村尾茉優（四国大）も50m54で大会新であった。女子走幅跳では宗村麻理子（美作大）が5m98（0.0）をマークした。続いて、翌日男子走り幅跳びで藤原駿也（広島経済大）が7m62（+1.2）をマーク。女子棒高跳で品川文音（岡山理科大）が3m65をマークした。その結果、男子最優秀選手賞は藤原駿也選手（広島経済大）、女子最優秀選手賞は居川汐里選手（四国大）となった。

中国四国学生陸上競技連盟広島支部　幹事長
広島修道大学　藤田　優

実業団連盟

2015年最初の駅伝、第59回全日本実業団対抗駅伝競走大会が、1月1日群馬県で開催され、広島県から中国電力、マツダ、JFEスチール、中電工の4チームが出場した。

中国電力は1区ルーキーの北選手が6位、2区では山崎選手が、強豪外国人選手を相手に粘り7位で中継し、3区以降も好走を見せ昨年と同様の5位に入賞した。

昨年29位のマツダは2区アイエレ選手、6区山本選手で順位をあげ17位に。中電工は、昨年の35位から30位に順位をあげ、特に1区若手の相葉選手が区間8位と健闘した。JFEスチールは序盤の出遅れが響き、33位に終わった。優勝は、4年ぶりにトヨタ自動車が手にした。

1月25日には、第78回中国山口駅伝競走大会が山口県で開催され、一般・郡市・高校の48チームが出場した。レースは、JFEスチールが1区ディランゴ選手で先頭に立つと、続く2区ではルーキーの岡本選手が区間新の快走を見せ、以降の区間も首位を譲ることなく8年ぶり3回目の優勝を果たした。2位にはマツダを最終7区で逆転した中国電力がはいり、3位マツダ、4位には中電工が続いた。今シーズンの駅伝は、各チーム若手の活躍が光る大会となった。

広島県実業団陸上競技連盟　事務局
JFEスチール　山下　里恵

優勝のゴールテープを切るJFEスチール（中国山口駅伝）

マスターズ連盟

2014年を振り返ってみると、3月に行われた広島マスターズロードレースから始まり、4月20日に道後山クロスカントリー大会、続いて5月25日には広島マスターズ陸上競技選手権大会を尾道市の県立びんご運動公園で開催致しました。選手権大会には21種目の競技に延べ375名もの参加者があり、円盤投M90クラスで大会新記録を出すなど、県新記録11、大会新記録が30も生まれた素晴らしい大会でした。また9月には岡山県津山市で中国選手権が行われ、広島マスターズからも171名が参加し、その中で3000m、M25クラスの部で9分54秒82の日本マスターズ新記録を樹立し、敢闘賞受け大会を盛り上げることができました。それから後に開催されたアジア・全日本マスターズ選手権ではM75で5000mW、800mで大会新記録を樹立、昨年に続いて広島県勢が活躍致しました。このように数々の大会で広島マスターズ会員は優勝者、入賞者も多く、全国的にも強さを発揮することができました。

また、11月23日には第31回中国マスターズ駅伝が庄原市の備北丘陵公園で開催され、広島県チームは一般の部で見事優勝、第1回～第5回目までの連続優勝以来、実に26年振りの優勝でした。

広島マスターズにとっては記録に挑んだ充実した1年間だったと思います。

宮本武利会長率いる広島マターズは陸上競技愛好者の仲間を増やし、今後も活動の輪を広げて参ります。

ホームページアドレス
http://hiroshima-masutazu.com

広島マスターズ陸上　広報　福留　征二

県選手権大会で表彰させるM90、福井さん

青少年の夢を応援します!

青少年健全育成協力企業

●株式会社サタケ
●広島駅弁当株式会社
●株式会社広島銀行
●広島ガス株式会社
●広島電鉄株式会社
●学校法人石田学園
●株式会社中電工
●株式会社もみじ銀行
●広島綜合警備保障株式会社
●有限会社ニシヒロ
●アシックス販売株式会社
●有限会社道後山高原サービス
●ひば・道後山高原荘
●株式会社体育社
●中国電力株式会社
●大塚製薬株式会社広島支店　（順不同）

全国中学校駅伝大会を終えて

2015.12.14 in 山口

男子

平成26年12月14日、本校陸上競技部は、広島県代表として全国中学校駅伝に参加させていただいた。坂中学校では女子が5年前に初出場して以来の、男子チームでは初の全中駅伝出場であった。「全中駅伝8位入賞」。この目標をみんなで定めたその日から、生徒一人ひとりの意識が日ごとに高まっていく様子が、手に取るようにわかった。生徒がその日の思いを書き記す練習日誌に、駅伝への思いが綴られていく。その日誌を読むことが、いつしか私の楽しみとなった。男子部員11人がひとつとなり、互いを思いやって成長していく。その姿から、私自身、学ぶことが大変多かった。私は、本校が初任であり、陸上競技は未経験である。生徒に対しての技術指導はできないが、生徒の体調管理やデータ整理など、自分にできることをやりきろうと思い、とにかく動いてみることにした。生徒の力になりたいという思いしかなかった。全中駅伝当日、各都道府県の代表が、会場となったセミナーパークに集まった。会場は独特の雰囲気に包まれており、私はこのとき初めて全国大会の偉大さを実感した。生徒たちも過去にない緊張感の中、レースに臨んだ。大会の結果は16位。目標には届かず、いつもどおりの走りをすることができなかったことで、全国大会のレベルの高さを痛感した。生徒たちは涙を流しながら来年のリベンジを誓った。今回の全国駅伝を通して、本当に多くのことを学ばせていただいた。陸上競技未経験の私を全国の舞台へ連れてきてくれた生徒。そして、いつも支えてくださった保護者、応援してくださった地域の皆様、指導助言をいただいた関係者の皆様に、心から感謝の気持ちを伝えたい。

坂町立坂中学校　監督　竹下　雄介

僕たち坂中学校は、昨年末に山口県で行われた全国中学校駅伝大会に出場した。1、2年生の時からは、想像もできなかった「県大会優勝」を果たし、この夢の舞台に立つことができたのだ。しかし、ここまでの道のりは厳しいものだった。一年前の中国中学校駅伝で、目標を上回る4位入賞という結果に、「来年はいける」という気持ちが芽生え、この時から僕たちの全中駅伝への挑戦が始まった。肥田コーチの指導の下、毎日全力で練習に励み、いろいろな大会に出場することができるようになった。大会を終えるごとに全員でチームの平均タイムを確認し、確実にタイムを縮めていった。そして迎えた中国中学校駅伝では、坂中学校男子チームとして、初の優勝を勝ち取った。レース後、他校の選手から「全国も頑張れ」と応援してもらったことで、自分たちが広島県の代表であることを自覚することができた。全中駅伝に向けての練習が、翌日から始まった。それから一ヶ月、ついに全中駅伝の日となった。前日のミーティングでコーチから「やれることは全てやった」という言葉をかけていただき緊張がほぐれたことが、今でも心に残っている。全中駅伝では8位入賞が目標だった。しかし、結果はまさかの16位。これまで指導してくださったコーチや、支えてくださった方々に申し訳ない、と涙がこみ上げた。しかし、僕は最後まで胸を張った。満足のいく結果ではなかったが、全国大会のプレッシャーの中、後輩たちがここまで頑張ったということが、僕には「誇れる結果」だった。来年、僕以外は全員チームに残る。後輩たちが、2015年こそ「頂点」を獲ってくれると期待し、僕も高校で走り続けようと思う。

坂町立坂中学校　陸上競技部　浅野　成海

女子

今年は、故障者も出て、本当に苦しい中での県大会を経験しての全国大会出場だった。大会当日にむけ、生徒の体調を考えながら試走や練習をしていった。なかなか調子が上がらず不安を抱えたままのスタートとなった。子ども達は、このような状況でも全力でレースに臨み、自分の力を出し切るよう頑張った。力不足で思うような結果を残すことはできなかったが、全中駅伝のすばらしい舞台での経験は、今後の生活に必ず生きていくものと思う。全中駅伝に出場できたのは、つねに高いレベルで競い合う東広島の地域性や、これまでご支援いただいた市の陸上競技協会、教育委員会、地域や保護者の皆様のお陰であると感謝している。これからも、つねに目標を持って、頑張っていきたいと思っている。

東広島市立八本松中学校　監督　水田　孝

私達、陸上部女子は、中国中学校駅伝で三連覇し、全中駅伝に三年連続で出場することができました。「三連覇」という周囲からの期待がプレッシャーとなることもありました。チームがまとまらず悩んだこともありました。チームがまとまらず悩んだこともありました。だから、中国中学校駅伝で三連覇できた時の喜びはとても大きいものでした。そして、全国大会に向けてより一層、一生懸命に練習しました。全国大会では自分達の力をすべて出し切り、広島県の代表として恥ずかしくない走りをすることを目標にチーム一丸となって努力しました。その結果、24位という成績を残すことができました。このことは、部員全員がお互いに支え合い励まし合いながら日々練習に取り組んだ成果が出たからだと思います。それは、いつも熱心に指導してくださる先生方、日々懸命に応援してくださる保護者の方々、地域の皆さまの支えのお陰だと思います。3年生は、この貴重な経験を糧に高校でもさらなる高みを目指して努力していきます。1、2年生は常に上を目指して、お互いに励まし合って頑張ってほしいです。これからも感謝の気持ちを忘れずに精一杯努力をしていきますので、八本松中学校陸上部の応援をよろしくお願いします。

東広島市立八本松中学校　造賀　麻里

中国女子世羅駅伝を振り返って

◀世羅町や協賛社のご協力による、米俵をはじめとする副賞の品々

2015中国女子世羅駅伝競走大会

歓迎 世羅台地で煌めけ！

「中国女子駅伝を世羅町で開催するらしいですよ。」昨年、28回で幕を下ろした中国女子駅伝大会。終了後に、「お疲れ様!」と杯を酌み交わしたのはわずか4か月前。しかし、あくまでも噂であろう、あるとしても世羅駅伝に乗っかって私たちはお手伝いに行けばいいのだろうと高をくくっていたのに9月に広島陸協から届いたお話は、「2月の第二週、世羅町で中国女子世羅駅伝が開催されることになりました。つきましては女性審判員を集めてもらえますか? 場所は世羅に変わりますが、中国女子の女性審判員でこれまでのノウハウを生かした新しい大会を作ってください。」…エエ?！驚いて悩んでいる暇はなく、選択肢は『やるしかない』。そこから始まった大会準備ではありましたが、女性審判員の皆さんは快く引き受けてくだり、主任を中心にあっという間に1年前の中国女子駅伝のメンバーが再度世羅町へ結集しました。開催に至るまでの世羅町教育委員会及び世羅郡陸協、ボランティアの皆さんのご支援には言葉では表せないほど感謝しております。

生憎の天候の中でのスタートとなり、心の中では、途中中止もやむを得ないのか、医療機関との連絡は大丈夫なのかと心配は募るものの、第1回目を絶対に成功させなければという熱い思いでいっぱいでした。（私達からすれば）猛吹雪の中、スタートした選手を見送った後、各中継所から送られてくる記録に胸を撫でおろしながら大会は無事に終了しました。大会の流れは、新聞等でご存知のとおり、2区以降は広島市陸協Aの独走態勢でレースは展開され、最優秀選手、ドリーム賞共に広島市陸協Aの沖野さんと大西さんが選ばれました。選手宣誓に胸を熱くした開会式から、最後まで走り切り、笑顔で閉会式に出席された全女性選手に大きな拍手と来年へのエールを贈りたいと思います。

広島陸協　大会総務　浜口千枝

▲走路はこの幟でピンクに染まった

▲浜口総務より説明

▲監督会議

▲開会式

▲雪が舞い踊る中、復活のスタート

平成27年3月13日　〒730-0011 広島市中区基町4番1号（公財）広島県体育協会内 Tel.082-223-3256 Fax.082-222-6991 E-mail:Haaa@eos.ocn.ne.jp URL http://www1.ocn.ne.jp/~hrk34/index.htm
編集委員　藤原 文代・渡辺 勇一・松﨑 親男・政 泰治・河田 慎司・金尾 誠可・松谷 清志